
皐月の殺し屋

結城 真理歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

皐月の殺し屋

【Nコード】

N8316T

【作者名】

結城 真理歩

【あらすじ】

五月の皐月。

紫陽花が咲き乱れる頃にきた、一通の手紙。

その手紙で、理央の生活。楽しい日々は、壊されていく。

皐月の殺し屋。

皐月の手紙（前書き）

駄作ですが、お暇があればどうぞ。

皐月の手紙

緑豊かな大地広がる。

五月に咲く紫陽花は、この時期が見頃。辺り一面に咲く紫陽花は、この世のものとは思えない程に美しい。

けれども、この村の住人は、この時期を好まない。

何故なのか。それは、五年前。一通の手紙から始まった。村に届く、一通の内容。

「これから毎年の五月。紫陽花が咲き乱れるころ、この村のシンボル、大きな木のある場所に、若い女を二人。用意する事。これを守らぬと、お前らの村の人間を、10殺す。他の村に言った場合、村の人間を30殺す。

皐

月の殺し屋」

と…いう文章だ。

もともと、この村の人口は百数人。村長は焦った。直ぐ様、村人達を呼んだ。

村長は言った。皐月の殺し屋というものから、手紙が届いた事。女を紫陽花が咲き乱れるころに、イケニエとして、出さねばならないという事。

これを聞き、慌てるもの。泣き叫ぶもの。大人しくなるものが、多々出た。

そんな中で一人。五年前は、十一歳の少女は、凜と立っていた。

彼女の名前は、理央。小さな頃からその美しい容姿で、村中を魅了した。まるで、パッチリとした目は、二重で、輝いていた。雪のよな白い肌は、より一層彼女を引き立てるのだった。

彼女は、生まれてすぐに母を亡くし、父も早くに亡くなった。

けれども、彼女の目には、これからの未来と、限らない可能性が、鮮やかに彩っていた。

お婆さん、お祖父ちゃんにかこまれ育った環境は、理央の心の闇を

うち払った。

いつまでも、楽しく過ごしたかった。

手紙がきて、三年が経ったある日、村の人間は、イケニエを差し出すのを辞めた。

ザアザアと降り注ぐ雨のもと、十人が殺された。

理央のまぶたからも、涙が雨の如く落ちていった。

理央のお婆ちゃんとお祖父ちゃんが殺された。

皐月の手紙（後書き）

誤字などがあつたら、注意をお願いします。

涙の決心（前書き）

二話目を作りながら考えたこと。

……私の小説なんて、見てる人居るのか？（笑）

何か、最近疑問です。（苦笑い）

ってことなので、お暇がある方はコメントを下さると嬉しいです！

涙の決心

今、頭にある事

憎しみ。悲しみ。恨み。それから……ふく、しゅう。

中学生二年生の理央は、このとき、復讐という事が頭から離れなかった。

理央の目は、雨雲よりもこく、深い闇に、包まれていった。

頭に過るのは、お婆ちゃんとお祖父ちゃんの亡骸と…

声、。

そう。確かに聴こえた。

人の不幸をあざ笑うかの様な不気味な声。思い出すのも嫌なほどだった。

そういえば…

理央は、ふと思った。「イケニエとして、連れていかれた人は…どうなったのかしら。」

殺すのならば、あの時のように堂々と殺せばいいのに。どうして？

しかも、どうして気持ちも無くヒトヲコロセルノ？

わからない。ワカラナイ。

一回、見てみたい。その顔を。

あつたら、ガツンと言ってやりたい。殴って、命を解らせてやりたい。

理央は、決心した。

そいつに会いに行く。

お婆ちゃんもお祖父ちゃんも居なくなつた理央を、止められる者は居なかった…。

涙の決心（後書き）

次から少しグロかったりエロかったりするかな？
すみません。曖昧で…

ワインレッドな出会い（前書き）

前期中間テストおわったあ><

って事で作りました。

どうぞゆっくり閲覧下さい。

ワインレッドな出会い

大丈夫かい？と、村のお爺さんが問う。

大丈夫。心配しないで。私は平気よ。理央は、目で訴えかける。

村人達は、理央が行く事を解っていた様に、荷物をサツと差し出した。

理央は、十五歳になり、とても色っぽい。相変わらず色白で、スラリとしている、誰もがあこがれる存在だった。

フワリと漂う理央の匂いは、あの頃と変わらない。お婆ちゃんの匂いがした。

「私が、四年目のイケニエとして、村を去ります。またね！」

サヨナラは言わない。

きっと勝って見せる。皐月の殺し屋に。息を呑み、理央は、もう一人のイケニエ、露奈ろな

と共に、大きな木のもとへと歩く…

「？っ…かえりたいよあ…」

泣叫ぶ露奈。まあ、仕方ない。普通は帰りたいに決まってる。理央を除いての話だが…

そうこうしているうちに、大きな木のもとへと到着した。心が震えている。

「キャアアアッ！！」

「露奈？！ワアッ」

露奈の悲鳴に気づき、振り向いた時にはもう手遅れだった。視界が閉され、理央と露奈は気を失った…。

理央は、目を覚ました。

「す…すごい。」辺りには、ワインレッドのじゅうたんが続く。天井には、シャンデリアがつつてある。

「ここが、…皐月の…」

「呼んだ？」

「！？」

イキナリ耳もとでささやかれ、声にならない様な声をあげた。

「いらつしゃい。来てくれて嬉しいよ。」

黒髪で、目がきりつとカッコいい、二十歳位の男が、理央を、背後から抱きしめる。

力が強く、女の理央には手も足も出なかった。

ワインレッドな出会い（後書き）

誤字などがあったら、忠告お願いします。

連れて行かれた露奈

「痛いっ！やめてえっ」

どんどん強くなつていく腕に、理央は悲鳴をあげた。

「…あれえ、ここ何処？」

露奈は目を覚ました。

ちっ、と舌打ちをした男

が、パチリと指を鳴らした。

スタスタ…

仮面を被った男達が数十人現れる。

「その女性を牢へ。」

「！？」

ガシリとつかまれ、泣き叫ぶ露奈を、あっという間に、連れて行つた。

「露奈！あんた、露奈をどこに…」

さらりと理央の髪にふれ、男が言った。

「君は美しい。こんなに美しい人がくるなら、ヒースに賛成かな。」
なにを言ってるんだこいつは。

どんなにかっこ良くても。今は、理央の怒りの材料にしかない。
バンッ！ 勢いよく何が男のもとに飛ぶ。

これって…ナイフ！？

理央は気が動転して、パニックになった。

「俺の物に手エ出すなって言ってるんだろ！この女つたらし！」

イキナリでて来て怒鳴る男。ソレを冷静に受け流す男。理央は、その光景を、ポカーンとみているしか出来なかった。

「ヒース、お願いだよーこの子だけ譲ってくれないかい？」

「ふざけた事を言っていると、今度は心臓を射抜くぞ。シトラ。」
どうやら、最初にいた男の名はシトラと言つらしい…

「オイッ、お前、こっちへ来い！」

「わっ…私？」

「そうだよ！さっさと来いよ！！！」

…まさかこの人が、皐月の殺し屋？また、怒りが込み上げてきた。

「嫌よ！」理央は、強く言い放った。

「だつてさ…ヒース！」

笑いをこらえながシトラが言う。この人は、ヒースを怒らせたいだけなのか…

理央は、呆れる。

「お嬢さん。一つ教えてあげる。」

理央は、シトラの方へ振り向いた。

「なん…ですか？」

「ここには、俺とヒース以外に三人危ないやつが居るから、気を付けろよ！」

「…はあ、…わかりました。」

先行き不安だが、一步皐月の殺し屋のもとへと近づいている事が嬉しかった。

連れて行かれた露奈（後書き）

誤字などがあったら、お伝え下さい。

同じ思いの彼

コツンツ コツンツ！と、ヒースという名の男のブーツの音が響く。
「ついたぞ。中に入れ。」

牢屋を指差し、理央の背中を押す。

「なんでこんな事してるの？」

静かに聞いた、理央の問いに答える間もなく、ヒースはドンツと理央を押し込み、足早に去って行った。

「はあ……。」と、ため息をついた。

その時だった。声が聴こえたんだ……

少し低めの甘い声。溶けて消えてしまいそうな、そんな声だった。

「貴方……だあれ？」

思い切って聞いた。

「オ……レ？ 俺は、捕まった村人……かな。大好きだった姉さんの敵を取りたかったんだけど、なんだかあっけなく捕まっちゃったな……。」

甘い声で、呑気に語る男。何故か微笑んでしまう……

「貴方、何処らへんの牢に居るの？」

「梨紅^{りく}でいいよ。君の牢の斜め右かな？」

な……斜め、右。と振り向くと、そこには、黒髪の、少しマル目の男が、こちらをニコニコと見ていた……

「初めまして。君は、名前なんて言うの？」

理央は、心臓の音が異常に大きくなっているのに気がついた。

「理央……です。よろしくね？ 私も、敵討ちのつもりだったんだけど、あっけなく捕まっちゃった……えへへ。」上手く笑えてない自分……。
それでも微笑んでくれている彼を見て、理央は心惹かれていった。

同じ思いの彼（後書き）

短くて申し訳ないです…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8316t/>

皐月の殺し屋

2011年10月9日07時30分発行